

## 学校で取り組む「がん教育」の実際について

～外部講師の活用及び保健体育科との連携について～

鹿児島県立曾於高等学校

養護教諭 實方 めぐみ

### 1 はじめに

本校は、「笑顔輝き 夢かなう 曾於高校」を校是に、平成26年度三校統合により開校した新設校で、現在全校生徒3学年5学科432名の学校である。

今年度本校は、令和4年度鹿児島県がん教育総合支援事業「モデル校」の指定を受けた。

がんに対する正しい理解とがん患者に対する正しい認識及びいのちの大切さに対する理解を深め、自らの健康を適切に管理していこうとする態度を身に付けることをねらいとし、がん教育について全校体制で取り組むこととなった。

### 2 がん教育のねらい

現在、がんは日本人の約2人に1人が罹患するなど、非常に身近な疾患である。また、平成19年のがん対策基本法が施行されて以来、がん患者に対するさまざまな体制の整備や取り組みが行われている。

がん対策推進基本計画（第2期）には、がん教育が組み込まれ、平成29年度からは小学校、中学校、高等学校の学習指導要領にも記載された。

がん教育は、「がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育」と定義されており単にがんに対する知識を学ぶ場ではなく、人格形成の向上も要求されている。

### 3 がん教育に関する指導の目標

- ① がんについて正しく理解できるようにする。
- ② 健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする。

### 4 取組内容

#### (1) 校内での啓発

##### ア がん教育講演会の実施

全校生徒を対象に、鹿屋市立鹿屋第一中学校校長 吉岡 一徳 氏に依頼し、「がん教育をストレスマネジメント ～ストレスとの上手な付き合い方～」というテーマで講演の開催。



講演会後は、各教室にて県発行のパンフレットを活用し、振り返りの時間を設定した。

##### イ がん患者さんへメッセージ



カプセルメモを全校生徒へ配布し、がん患者さんへメッセージを書いた。カプセルメモは、支援団体を通じて、プレゼントした。

##### ウ 外部講師を活用した授業の実際

がんサポートかごしま 理事長 三好 綾 氏を招き、文理科2年生を対象にした研究授業を実施。実施に当たっては、保健体育教諭とのチームチーングによる方法で行った。



授業については、対象クラスの保護者へも参観案内を配布した。

## エ 図書委員会との連携

『よみぐすり』とネーミングした紙を紙袋に貼り、処方箋のように本についての効果や読む時間などを記載し、図書館で展示を行った。



## オ 生徒保健委員会での取組

「高校生である自分たちが、できること！」をテーマに、項目毎に様々な取組を行った。

### (ア) がんを予防できるスープの開発



- (イ) ヘアドネーションを取り扱うお店リスト
- (ロ) ヘアドネーションを行う時の注意点
- (ハ) 帽子の作り方、生地選び方
- (ニ) 家族ががんと診断されたら（相談窓口）

## (2) 校外へ広げる啓発

### ア 教職員を対象にした研修会の開催

県内の教職員、曾於市役所、志布志保健所管轄を対象に「モデル校研修会」を開催。

講義のテーマ等は以下の通りである。

#### (ア) 相良病院 医長 川野 純子 氏

「がん教育に取り組む上で知ってもらいたいこと～乳がん領域から～」



#### (イ) 鹿屋第一中学校 校長 吉岡 一徳 氏

「がん教育をストレスマネジメント」

#### (ロ) 県教育庁保健体育課 栗山 稔久 指導主事

## 「学校におけるがん教育について」

### (エ) がんサポートかごしま理事長 三好 綾 氏

「外部講師の役割、配慮事項等」

## イ 大隅地区高等学校保健体育研究会

大隅地区の保健体育教諭を対象にした研究会を「モデル校研修会」同日に開催。

保健体育の授業にて取り扱う際の参考になるよう、外部講師を活用した公開授業を参観した。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

ア 事前・事後アンケートより、「がん」は身近な病気であり、検診が重要であると回答する生徒の増加、がん患者さんへの思い、家族とがんについて話し合う機会の増加から、一定の効果が見られたのではないかと感じた。

イ 「がん」というテーマについて、生徒同士で話し、自分たちに今何ができるかなど、患者さんの立場に立ったケア等について話し合う機会が増加した。

ウ 本校職員からも、「がん教育」の重要性について再認識できたという意見もあった。

### (2) 課題

ア 生徒への配慮事項については、その年その年で状況が変わっていく可能性があることから、その都度学校で対応し、「がん教育」の進め方について、考えていく必要がある。

イ 外部講師を活用するに当たり、予算の確保が必要である。

## 5 今後に向けて

今回、モデル校の指定を受けて、校内外の関係者とともに学ぶ機会を作ることができ、啓発という点においては、ある一定の効果を達成することができた。高等学校における「がん教育」の推進は、始まったばかりではあるが、重要で意味のある教育の一つであると考えている。今後も「がん教育」推進に向けて、学校全体で連携を図り、様々な取組を行っていきたい。